

2007年8月12日

# 大学の窓から

中村祐司

■2

思いにとらわれた時の、身が縮むような恐怖感も味わった。

満ち潮のため、いつの間にか岸が遠くなり、こんなに水かさが深くなってしまったのか、という自然の脅威も肌で知った。海の楽しさ、やさしさ、怖さ、そして脅威。南伊豆の自然は、幼少時代の私にいろいろなお話を教えてくれた。

しかしその後、磯の多くが禁漁区となった。それを表示する看板が無性に憎たらしかった。当時、1万2千人以上であった町の人口は、現在では1万300人余りに減少し、高齢化も進む。故郷の思い出と、町が抱える現実の課題とは相いれないものかもしれない。

(宇都宮大学国際学部教授)

小学生のころ、夏になると祖母のいる静岡の南伊豆に行き、海底の岩や海藻に張り付いている小さな円錐状の「しつたか」や、大きな小判状の「とこぶし」を夢中になって取った。

貝を見つけた時のうれしさと、はやる気持ち、そして、手に入れた時の快感は格別であった。

一方で、岩の間からぬうっと不気味に顔を出すウツボに遭遇した時や、揺れ動く一塊の海藻から何かが飛び出してきそうな

## と課題と出思い、郷故